

お清が後を追って

〔六〕 お清が後を追つて

一九〇

今日は夫佐兵衛の七年忌だと云ふので、綱屋では法事を営んだ、田舎には珍しい立派な供養をした、夜になると念佛講が集まつて。

「チン／＼カチン」

と鐘をたゝいて題目を唱へて居る、念佛の鐘は誠にきいても寂しいものだ、この念佛が初まると今迄奥の間で親類と話して居たお大が、スット立ち上つた、驚く人達の間を飛鳥の様にとびこえて、次の間にスヤ／＼と眠つて居た、子供をムツと抱きかゝへて庭へ飛び降りた。

「お内儀さんが大變だ」

「それッ」

と法事に集つた親類や縁者、数多い奉公人が一度にあとを追かけた赤子を抱へて家を飛び出したお大は、畑と云はず溝といはず、髪を振り亂してかけて行く、其早い事は目にも止ら無い。

「お内儀さん……………」

「お大や……………」

と呼び乍ら追かける人の聲を耳に入れない、だん／＼走つて錦川ふちに出た、この時向ふから馬子が荷をつけてやつて来た。

「あなたは綱屋のお内儀さん、マ、どこへ行きなされるのですよ」

お清が後を追つて

一九一



お清が後を追つて

一九二

止め様とした馬子の胸倉を握つて。

「お清や、お前私を怨むのかい、ひどい、あんまりひどい」

と布を裂く様な聲で云つた、狂亂の女に不意に胸倉をとられて、馬子は眼をパチクリさせる許り。

「私はお清ではありません、平、平作です」

「お清はどこい行つた」

と後へつき轉ばして又々走つて行く。

今しも嘗て身をなげて死んだ、かのお清が淵へ來ると、水の面に向つて、一丈もある高い崖から身をおどらせて。

「ドブーン」

と飛び込んだ、ヒーヒーと泣き叫ぶ赤子を抱えたまゝとび込んだのだ、追ひ掛けて來た人達はこの出來事にビツクラして。

「アッ」

と云ふた限り言葉が出無い、親父さんは腰を抜いてしまつた、蒼い凄い水の面には。

「ヨブ〜」

と水煙りが立つたが、後は拭いた様になにもない。網屋の親族のかざり、召使の多人數が淵の面を見詰めて居たとき、

お清が後を追つて

一九三



お清が後を追つて

一九四

水の中からスラ／＼と現れたのは、お清がお君を抱えた姿であつた。群衆の方を向いてさもうれしさうに、ニコ／＼と笑つた、黄昏のお清が淵は一際凄味を増した。

\* \* \* \* \*

星うつり年かはる百五十年、今もお清が淵はまつ青に深く淀んで居て、村人がこの淵へ臨むと凄く怖くなると云ひ傳へられて居る。分限の綱屋も其後跡がたへて、只年老つた人の話に大盡の家だつたと上る許りとなつた。

船

幽

靈(終)

大正六年二月一日印刷  
大正六年二月五日發行

【不許複製】

編輯者 大川 錠吉  
兼 大川 清三

發行所 大川屋書店

電話下谷一五七三番  
振替東京四〇〇九番

印刷者 大川 清三  
印刷所 大川屋 印刷所

(怪談百物語)

船 幽 靈

定價 金十二錢  
郵稅 金四錢



形 ト ツ ケ ホ  
**怪談百物語**  
 冊 百 全

七 六 五 四 三 二 一

■大好評の百物語■

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 船  | 幽  | 不  | 本  | 鍋  | 麻  | 化  |
| 幽  | 靈  | 思  | 所  | 島  | 布  | 物  |
| 幽  | の  | 議  | 七  | の  | 七  | 長  |
| 手  | 白  | 思  | 議  | 化  | 思  | 屋  |
| 靈  | 引  | 狐  | 議  | 猫  | 議  | 屋  |
| 定價 | 定價 | 定價 | 定價 | 定價 | 定價 | 定價 |
| 貳拾 | 貳拾 | 貳拾 | 貳拾 | 貳拾 | 貳拾 | 貳拾 |
| 錢本 | 錢本 | 錢本 | 錢本 | 錢本 | 錢本 | 錢本 |
| 郵稅 | 郵稅 | 郵稅 | 郵稅 | 郵稅 | 郵稅 | 郵稅 |
| 全一 | 全一 | 全一 | 全一 | 全一 | 全一 | 全一 |
| 錢冊 | 錢冊 | 錢冊 | 錢冊 | 錢冊 | 錢冊 | 錢冊 |

□以下續々新刊

東 京 大 川 屋 發 行 書 肆



1278  
1124



終